

年中行事 4 (秋と冬)

大野城市教育委員会

七五三



七五三は氏神様に詣り子供のすこやかな成長を感謝し将来の幸福を祈る行事です。三才女兒の「髪置の祝」五才男児の「袴着の祝」七才女児の「帯直しの祝」を七五三の祝いといいます。もともとこの行事は古くからあり、お宮詣り着物は特にありませんでした。日も11月15日にしたのは江戸時代からのようでその時千歳船も配りました。昔は幼児の生存率が低かったところから七才になればもう一人前になれるということから七才の祝いを大切にしたということです。

菊 (重陽の節供)

菊は、春の桜や梅と同じように日本の秋の代表的な花になっています。797年に薬用として中国から輸入されたのが後に鑑賞菊となりました。奈良・平安時代から陰暦9月を「菊月」といい9月9日を「重陽の節供」といいました。この日は丘に登り菊花酒を飲み、女は「しゅゆ」を身につけて邪気を払い災厄から逃れる習慣がありました。江戸時代になると、重陽が五節供の一つになり、浅草寺観音堂で菊供養があったり、菊合せや菊人形が作られたりしました。所によっては「クンチ」といって赤飯と餅に菊の花をそえて収穫を祝うところもあります。



冬至 (12月23日ごろ)

一年中で最も昼が短くなる日が冬至です。この日から再び昼が長くなって行くので「一陽来復」「一陽喜節」といって独自の行事をしました。南瓜を食べるのもその一つです。これを食べると魔よけになり、夏のわずらいをしなくなる等俗信もあります。昔は保存のきく南瓜は貴重な栄養源だったようです。又柚子湯に入ると病気をしないとわれています。節日に厄除けのため湯に入る風習は、正月の「五木湯」5月5日の「菖蒲湯」と同じ考えでしょうか。柚子は今でも、ひび、あかぎれに効果があるといわれています。厳寒の頃によいのかも知れません。



餅つき (12月下旬)



餅は大陸から稲作りが伝わって来た後つかれるようになりました。餅は歳神様を迎える供え物だったので、暮の25日から28日にかけてどの家でもつきました。しかし29日と丑の日には九が苦に通じるのでさけました。餅つきの時に使う大釜の火は新しく火打石で切ったり、新しい藁を敷いて塩をまきその上に臼をすえて清めました。その後餅は主に正月飾りや節供、子供の誕生、婚礼、新築祝いなどおめでたい時に使うようになりました。餅には、栗餅・栃餅・豆餅・黍餅・カンパ餅・葛餅・わらび餅などがあります。又その年生れの女の子のために「モチバナ」を作ったり、7才以下の子の無病息災と成長を祈る「えりかけ餅」等の行事につかうことがあります。

煤払い (12月13日)

もとは家を清浄にして歳神を迎える準備をするための行事でしたが、今では年末の大掃除のことをいいます。煤払いを13日にする習慣は江戸時代に一般に定着したようです。正月の準備をするということは「歳神」を迎える準備をすることで、煤払いもたんなる大掃除ではありません。神棚をはじめ家中の煤を払いおえたほうきを海老のように折り曲げ、翌年新しいものを作ったあとで海や川に流したり、肥料の上に乗せて「注連縄」をはってまったり、13日に門松用の松を山に取りに入る「松迎え」をしたところもありました。



大晦日 (12月31日)

晦日とは月の最後の日のことです。12月末は月の最後の月であると同時に1年のしめくりでもあるので大をつけるのです。「大つごもり」「除夜」などともいいます。昔は大晦日には歳神様を迎えなければならないのでお迎え前に寝ると神様の機嫌をそこねて、年をとることができない、新年を守ることができない、髪が白髪になるなどの言い伝えがありました。歳神様を迎えるためにけがれをはらい、身や家や地域を清めることが必要でした。こうした考えの上に仏教が入り「除夜の鐘」で煩惱をばらう行事が定着しました。又細く長く生きられますようにと縁起をかついで食べる「年越しそば」「運そば」を食べる風習が現在あるところもあります。

